コンクリートのふる舞い
2. ルーツは石積

地濃　茂雄

石灰石を主原料とするセメントと岩石が細かに砕けた砂・砂利を、ともに練り混ぜて固めたコンクリートは、まさしく人工岩石と呼べるものです。

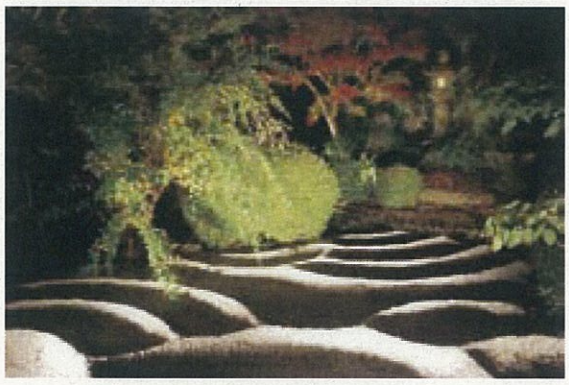
古来、自然石は容易に朽ち果てる物ではなく、永久に不変不動の物として扱われてきました。

不変不動の自然石を積み上げ、密実な石組みをしたピラミッドがそれを如実に物語っています。それは約2.5トンもある石灰石を約230万個、210層に積み重ねたものです。

このように古代エジプトのその石の重さは、そのまま西洋文明の歴史的構築の重さのように見て取れます。石の文化の礎がそこに映し出されているのです。

一方、わが国においては、石垣、石神、石塊、石挙、石子、石地、石敷、石摺、石鯛、石畳、石灯籠、石庭、石橋、石仏…のように石で綴られる言葉は多くあるものの、とりわけ歴史的構築を意味するほどの重い言葉ではありません。

「石の上にも３年」、「石に布団は着せられず」のことわざのように、堅く、冷たいイメージ。せいぜい長持ちする素材であることから、墓石か石垣程度の扱いしかされていなかったように思います。それは、わが国の気候風土からして無理のない話です。なぜなら、人々は木材の肌ざわりを好み、地産の木を建築に生かして来たからです。



庭を彩る石燈籠と石敷

木が主で「柱」。柱と柱のあいだが「間」。そして間なる言葉には、間取り、間抜け、間合い、間引く、間尺、間に合う、間もなく等々、暮らしの中には木が支配する言葉が沢山あります。木の命と木の温もりによって、わが国独自の文化が構築されてきたと言えるでしょう。

すなわち、対極にある石とは異なる文化を生み出してきたのです。こうした木の文化は、世界遺産の法隆寺伽藍で代表されるように、日本の伝統的空間として息づいています。

ところが、近代都市において、木は火に弱い物なので、不燃材料のコンクリートが都市の空間づくりにもてはやされている訳は、それにあるのです。

型わくにコンクリートを打ち込み、任意な形に出来上がった人工岩石の建物が、容易にかつ大量に造り出されています。

しかし、人工岩石と言えども、その素質からして粗なる物であり、密実な石組みを施したピラミッドのように無限の長寿を望めるものではないのです。

また、自然石のような質感も、人工岩石にはありません。だからと言って、むきだしの人工岩石そのものではものたりない。こうした背景から、石の自然美、重厚さ、磨けば光る石の美しさを、建築仕上の装飾材として、際立たせるような工法がそこに生まれました。いわゆる装飾的意匠の人工岩石への石張りです。自然石の質感を人工岩石の建物に託しているのです。

自然石という素材が人工岩石の身体を上手く着飾ってくれるふる舞いとともに、その着飾った建物空間をさらに石という素材のモニュメントや敷石が街に彩りを添えています。

いまや都市という場には、木造家屋の面影は少なくなっています。

小石すら触れたことのない若者たちに、人工岩石を着飾る天然石や、その身体となるコンクリートがどのように捉えられているのでしょうか。

（写真も筆者）

〔工学博士　新潟工科大学教授　当センター理事〕